

日本疫学会 ニュースレター

発行 廣畑 富雄
福岡市東区馬出3-1-1
九州大学医学部公衆衛生学教室
委員 稲葉 裕、上田一雄
曾田研二

平成5年12月31日発行 第3号

No.3

会員の皆様に

理事長
廣畑 富雄

ニュースレターの第3号をお届けします。平成5年、1993年はご承知のように、国内、国外ともに激動の年でありました。1994年がどのような年になるか分かりませんが、世界がそして日本が、より平和で、より豊かな、心の面も含めた豊かな年になってほしいと願っております。疫学の第一義的な目的は、健康の増進であり疾病の予防です。国民の健康に密着した学問として、会員の皆様と共に疫学の発展に努力して参りたいと存じます。

日本疫学会の発展については、何と云っても学会誌、Journal of Epidemiology の充実が大切です。幸い投稿数も増加し、海外からの投稿の割合合わせもあり、遠からず年4回、quarterly の発行にもっていきけるのではないかと期待しています。世界的に certify された雑誌に早くしたいものです。また疫学は学際的な学問で、多方面の人々の共同による研究が必要です。この意味で各方面の、特に臨床サイドの会員の増加を期待しています。

1993年の後の半年の日本疫学会関連の出来事を振り返ってみますと、最大のものとは第14回国際疫学会学術集会が、1996年に名古屋で開催される事が決まったことです。これは9月末のシドニーでの IEA 総会で決まりました。次期学会長の青木國雄先生をはじめ、名古屋の方々を中心として学会開催のため

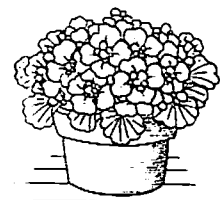
に努力される訳ですが、日本疫学会としてもその成功のため全面的に協力しなければならぬものと思っております。また青木先生は国際疫学会の理事長に選出されました。会計担当の理事 (treasurer) は、柳川洋先生から田中平三先生に変わりました。このニュースレターでは、青木先生に1996年の学会開催に関し寄稿して頂きました。

難病の疫学は、世界の疫学の中で、日本の誇れる分野だと思います。柳川洋先生 (自治医大) は1988年から1992年迄2期にわたり、いわゆる難病の疫学班の班長を勤められました。柳川先生に「難病疫学研究の進歩と今後の課題」という題で執筆して頂いております。また柳川堯教授 (九大) に「バイオ統計学と疫学」という題で書いて頂きました。先生は NIEHS (National Institute of Environmental Health Sciences)、NCI (National Cancer Institute) など海外研究生活が長く、日米バイオ統計学会議の日本側の実質的なオーガナイザーでありました。日本の数学者の中の数少ないバイオ統計学者です。先生の文中に「・・・バイオ統計学の組織的な研究・教育という点で、わが国はいまだに皆無に等しい。」という言葉がありますが、これは本当に大きな問題、課題であります。

この他にがんについては、「がんの疫学、回顧と展望」という題で私が書か

せて頂きました。がんの疫学は、戦後非常な発展をとげてきました。しかし現在ある意味では、turning point を迎えているように思えます。その他、第4回日本疫学会学術総会のご案内を久道先生に書いて頂きました。臨床疫学を主題にし、久道先生の豊富なアイデアのもと、興味ある有意義な学会になると思います。多くの会員の方々、あるいは臨床サイドの会員外の方々もお誘い合わせの上、多数のご参加をお願いします。なお初めての試みとして、久道先生のお世話で「疫学セミナー」も学会に引き続き開かれることになっております。これにも多数のご参加を期待致します。

本年は、1月、6月、10月の3回理事会が開かれました。1月、6月の確認済みの議事要旨をのせております。要旨をご覧頂ければ分かるように、日本疫学会という若い学会の発展のために、私も理事の方々も努力しておりますが、会員の方々からも遠慮なく貴重なご意見を頂きたいものと思っております。宜しくお願い申し上げます。



事務局からのご連絡

東京医科歯科大学

教授 田中 平三

1. 事務局として、また編集委員長として Journal of Epidemiology への投稿をできるだけお願いします。
2. 1993年、また1994年の会費の納入をお願いします。
普通会员 5,000円、評議員 7,000円です。
郵便振替番号は 東京 4-551591で、加入者名 日本疫学会 となっております。
3. 平成6年10月頃に次期理事の選挙が行われます。
宜しくお願い致します。

国際疫学学会(IEA)学術集会(ISM) の1996年 名古屋での開催

愛知県がんセンター

総長 青木 國雄

Sydneyでの第13回IEA学術集会(ISM)総会で、次の1996年のISMは名古屋に決まった。この機会をのがすと当分の間誘致はできないと考え立候補に踏み切っただけにこの決定は感慨深いものがあった。学会誘致は多くのIEA会員の年余にわたる御支援のたまもので、心から感謝申し上げる。1991年の名古屋でのアジア・太平洋地区のIEAのRegional Scientific Meetingが好評だったことも理事会の心証をよくしていたが、なんといっても柳川理事の地道な理事活動が日本への支援となったと考えている。

参考のため選挙の状況をお知らせしたい。立候補地は招聘努力を示すため、会場予定、予算案の他、その国の招待への熱意を示さねばならない。今回の立候補地はドイツ(Essen)、オランダ(Hagne)、カナダ(Edmonton)、中国(上海か北京)、イスラエル(Jerusalem)、日本(名古屋)の6都市で予想外に多かった。第一回意思表示は理事会で各地15分ずつプレゼンテーションの時間があり、そのあといろいろの質疑があった。誘致には理事会から

の条件がいくつかあることが分かった。中心はプログラムと予算である。赤字になった場合、学会は支払えないからである。幸い上位2都市の中に入り、オランダと日本との決選投票となった。規則では、総会出席者の投票でsimple majorityで決めるとある。最終日の総会議事が遅れ、学会開催地決定の選挙は夜8時近くとなり、出席者が減少していくのでははらしていた。日本人の大部分は帰国のため翌日朝5時半起床というので遅れた選挙がすむと懇親会も出席されず帰られた。当選について十分お礼を言う暇がなく申し訳なかった。学会途中で帰国された方も友人に日本への応援を依頼されたとのことである。Sydney在住の名古屋市関係者も何かと支援して下さった。学会誘致には名古屋周辺七大学の疫学関係教室から推薦書いただいた。また九月になり日本疫学会関係者からの推薦文が必要とのことで、あわてて理事長廣畑教授、事務局長田中教授のサイン入りの文書を送っていただいた。ヘルシンキの学会以来、毎回選挙の手続きが少しずつ違うので若干戸惑うことも多

かった。

次期学会へは、出席可能の地域だけで全世界の疫学情報交換が必要とか、地域保健戦略を立てる上での疫学の有用性を十分反映するプログラムを組んでほしいなどの要望があった。こうした文字どおり国際的な学会とするためには、たくさんの会員の参加が必要である。特に発展途上国からの参加者招待のためにはfellowship grantの確保が必要である。一方、内容のある学会開催のためには広く会員の声を聞き、質の高いプログラムを用意せねばならない。こういった事情で今後先生方からの御助言、御支援がなければうまく運営できない状況である。

なお、この総会で私が理事長(President)に選出された。図らずもというより余儀なくといったところである。RERF理事長の重松逸造先生のご意見もあり、学会誘致のためには有利との判断で、推薦を拒否しなかったのが間違いであった。もっともこれは私に來たのではなく、IEAへの更なる寄与を日本に求めたものであると理解していただきたい。国際学会の理事長は日本

人の不得意なところである。それは多くの国の人々をまとめ、リードする訓練や経験の場が少なかったからである。もっとも前会長のディーテル教授が理事で残られ、財政担当が田中平三教授に決まったし、事務局長には英国のノア教授を、理事も世界各国から人柄の

よい学者が選ばれたので、有り難いと思っている。IEAの基本方針は学問の振興と保健の向上のためには、公平公正、弱者への限りない支援がベースにあるので、私ども日本人には抵抗感が少ないこともやりやすい一面ではある。過去のIEA理事の生活や8年間の国際

対がん連合(UICC)プログラム委員長での経験を生かして頑張るつもりである。しかし仕事の範囲は広く、多種であり、この面でも今後会員諸氏の御助言、御支援をいただきたく重ねてよろしくお願い申し上げる次第である。

難病疫学研究の進歩と 今後の課題

自治医科大学公衆衛生学
教授 柳川 洋

1972年に重松逸造先生(当時国立公衆衛生院疫学部長)、山本俊一先生(当時東京大学医学部疫学教授)が世話人になって「特定疾患疫学調査協議会」が発足し、いわゆる難病8疾患を対象に全国的な疫学調査が行われたが、これがわが国における横断的な難病の疫学研究の始まりといえることができる。

厚生省の特定疾患調査研究に正式の研究班としてはじめて疫学が取り上げられたのは1976年度であり、「難病の地理病理学的環境科学的研究」班として初めて発足した。1979年度からは「難病の疫学調査研究班」という名前になって現在に至っている。1976年度から6年間は植松稔班長(当時北里大学医学部公衆衛生学教授)のもとで、また1982年度から1987年度までの6年間は青木國雄班長(当時名古屋大学医学部予防医学教授)のもとで研究が進められてきた。

1988年度より歴史ある研究班の世話をすべくという指示をいただき、微力ながら1992年度までの5年間、研究班の世話をさせていただいた。幸いに研究班関係者の弛まぬ努力により、わが国の難病の疫学研究の進歩に役立つことができたのではないかと考えている。昨年度までの5年間の研究成果の一端を紹介したい。

疫学研究の基本は、できるだけ高い精度で該当疾患の頻度と分布を明らかにすることである。当研究班は5年間に延べ21調査研究班と協力して、老人性円板状黄斑変性症、特発性両側性感音難聴、多発性硬化症、原発性免疫不全症候群、ペルオキシソーム病、ウイルス動脈輪閉塞症、劇症肝炎、広範脊柱管狭窄症、Budd-Chiari症候群、潰瘍

性大腸炎、原発性アミロイドーシス、混合性結合組織病、全身性エリテマトーデス、全身性強皮症、多発性筋炎、皮膚筋炎、サルコイドーシス、筋萎縮性側索硬化症、球脊髄性筋萎縮症、Kugelberg-Welander病、多発性嚢胞腎などを含む33疾患を対象に全国疫学調査を実施し、受療患者数の推計と基本的な疫学像を明らかにした。このような資料は将来にわたって難病患者数の推定、長期予後因子の解析などに役立つものであり、患者のプライバシーを侵害しないよう配慮しつつデータベースを作成してきた[大野、佐々木ら]。また、このような疫学調査の経験をもとにして、難病患者の頻度と分布を明らかにするための標準的な疫学調査方法を開発した[橋本ら]。

毎年20万人以上の難病患者が公費負担による治療を受けている。研究班は都道府県の協力を得て、定期的にこれらの患者の実態を調査し、加入保険、入院・通院治療、受診医療圏など、医療受給者の社会的、公衆衛生学的問題を明らかにした[柳川ら、稲葉ら、中村(健)ら]。

研究班の特徴の一つとして、病理学のグループの協力を得て、病理剖検報告データベースの疫学的研究への応用の意義、有用性、限界について検討を行ったことがあげられる。このデータベースには1974年以降の17年間に59万件の資料が蓄積されている。わが国の剖検率は約5.5%と低い値ではあるが、難病の剖検率は20%を越すものも少なくない。例えば、検索可能な難病23疾患を主病変とするものの悪性腫瘍合併率を観察した結果では、約12%が合併しており、重症筋無力症、多発筋炎、

皮膚筋炎、潰瘍性大腸炎、アミロイドーシスなどに高い合併率がみられた[藍沢ら]。

ベーチェット病、全身性エリテマトーデス、潰瘍性大腸炎、ピュルガー病、後縦靭帯骨化症などの医療受給者を対象にした患者対照研究、全身性エリテマトーデス、大腿骨頭壊死症、シェーグレン症候群、ピュルガー病、強皮症、老人性円板状黄斑変性症、頸部後縦靭帯骨化症、ウイルス動脈輪閉塞症、慢性関節リウマチなどの病院受診者を対象とした患者対照研究も行われた[橋本ら、廣畑ら]。

例えば、特発性大腿骨頭壊死症に関しては、飲酒、喫煙、労働量などの危険因子を明確に示すことができた[廣田、廣畑ら]。

また、全身性エリテマトーデスに関しては、患者の素因を示す因子、肉体的・身体的外傷、薬剤、妊娠・出産に関する因子、職場環境因子などが挙げられたことに注目したい[永井ら]。

1993年度から新しい研究班の班長として、名古屋大学医学部予防医学大野良之教授が指名され、新しいチーム編成で研究が進められつつある。今後も疫学研究は横断的な研究班の特徴を生かして、各研究班と密接な協力体制のもとに研究を進めていただきたい。特に各研究班との協力によるサーベイランス体制を確立して、変貌する難病の疫学像をタイムリーに把握することにより、わが国の難病対策の方向づけに必要な基礎資料を提供する責任があると考えられる。また、難病の疫学調査研究班はその性格上、医療行政関係者および各研究班に対して、難病患者の医療に関する基本的な情報提供を行う必要

がある。今後とも継続的に必要資料を提供し、各班の研究推進に役立てていただきたい。

特定疾患治療研究の医療費公費負担を受けている患者は年間20万人に及ぶ。

これらの患者の協力を得て、臨床疫学研究を系統的に進めることができれば、危険因子、予後要因、治療効果などに関する重要な知見ができる。特に治療効果の評価、QOLの評価、予後の解明

に関しては、他では得られない貴重な資料を提供するであろう。難病研究の今後の発展を心から期待するものである。

バイオ統計学と疫学

九州大学理学部
教授 柳川 堯

疫学に数量的な考えを導入した最初の文献として、マクメーンテキストはジョン・グラントの「死亡表に関する自然的、および政治的諸観察」(1662年)をあげているが、これは統計的研究の一番最初のものとして多くの統計学テキストで紹介される記念碑的文献でもある。

疫学の有用性に対する認識は、ロンドンの煙突掃除人ががんのエピソード(ウィリアム・ファー、1839年)で決定的なものとなった。統計学においても、同じ頃、ダーウィンの進化論の数量的証明を試みたガルトンやピアソンによって回帰、相関、カイ二乗検定など有用な概念が次々と開発された。

ピアソンが創設した「バイオメトリカ」は世界で最も権威ある統計学の雑誌の一つとされているが、いみじくもその名が示すように、統計学は生物学と切っても切り離せない仲で発展した。疫学と統計学との関係もまた然りであった。疾病をめぐる錯綜した因果関係を、データに基づいて数量的に解明するためには、当然のことながら、まずその方法論の研究から着手しなければならなかったのである。歴史はこのことを明確に示している。

さて、話は1940年代後半のアメリカにとぶ。この時代に疫学と統計学はともに established discipline となって department を作ることも、それぞれ独自の道をたどることになった。

Mantel と Haenszel の論文(1959年)は、医学でもっとも頻繁に引用されている統計学の論文であるが、「数理統計学関係の雑誌に掲載してもらえない見込みはなかったので JNCI から出版した」というマンテルの回顧にみられるように、この時代に、疫学に関係した統計学、つまりバイオ統計学、と数理

統計学の間すでに大きなギャップが現れている。

これではいけない。バイオ統計学は数理統計学とは別の範疇で位置づけなければならない。公衆衛生、予防医学の充実を目的とするためにその発展を積極的にサポートしなければならない。このように考えた National Institute of Health (NIH) は、バイオ統計学者養成に大きな予算を投入した。それが功を奏して School of Public Health にバイオ統計学科が誕生した。

現在、バイオ統計学科は、全米24の主要大学に存在し、毎年100人以上のバイオ統計学の Ph.D が生産されている。近年、製薬会社に職をえる者が増えているとはいえ、その多くは大学や政府、病院など公的な機関に就職して、疫学研究の大きな支柱となっている。

今日、疫学の研究は、これまで人類が経験したことがないほど高度化された情報化社会に直面し、その様相を急激に変えつつあるようである。臨床疫学、環境疫学、薬剤疫学、分子疫学等々、質の急速な深化、多様化とともに学際化が一段と進んでいる。筆者が、合計4年半勤務したアメリカの National Institute of Environmental Health Sciences (NIEHS) の疫学研究プロジェクトでは、医学者一人に対して、化学者、毒性学者、生物学者、バイオ統計学者、コンピュータ科学者等を含む20人以上のチームで研究が行われることもまれではなかった。複雑な遺伝的要因、環境的要因の絡み合いを如何にして数量的にモデル化すれば良いのか、また疾病をめぐる錯綜した因果関係を数量的に解明していくためには、データをどのような計画で収集し解析すれば良いのか等々について執ような討論が繰り返された。

産業革命の時代、新しい技術をいち早く身につけた者が勝利をおさめたように、現代のコンピューターを中心とする情報革命のなかで、21世紀に大輪の華を咲かせる疫学研究の芽を育てるには、再び根底にたちかえり、ファールガルトンやピアソンの時代がそうであったように、その方法論の研究から開始しなければならない。時代は、疫学者やバイオ統計学者に、その苦労をいとはない、という先端を切り開く研究者としての気概を求めているように思われてならない。

わが国では、1979年に第一回目が開催されて以来、ほぼ4年に一度の割合で、ヒトがんの研究に関する日米バイオ統計学会議が開催されてきた。この会議を通して日本のバイオ統計学者はケース・コントロール研究、コホート研究、ロジスチック回帰分析、生存時間解析等々の新しい発展を学ぶとともに、世界の第一線の研究に貢献する機会をえてきた。この間分析疫学が現れ、その方法論が飛躍的な発展をとげたが、そのような発展を見越してこの様な会議を仕掛けた仕掛人 平山雄、青木國雄先生の先見の明には、ただ恐れ入るばかりである。ただ残念なことには、アメリカや西欧にくらべるとき、バイオ統計学の組織的な研究・教育という点でわが国はいまだに皆無に等しい。先生方のご理解と助力を心からお願いしたい。



がんの疫学、回顧と展望

九州大学医学部公衆衛生学
教授 廣畑 富雄

がんの疫学、回顧と展望というタイトルを付けたが、限られた紙数で無論 comprehensive に述べることはできない。可能な範囲内で、また私見に偏るかも知れないことをお断りした上で、以下記してみたい。

がんの疫学は、他の分野の疫学的研究と同様に、実証主義を重んじる英米で大いに発展した。殊に第2次大戦後に大きな発展を遂げた。早くも1950年代にシガレット喫煙と肺がんに関する重要な複数の研究結果が発表された。まず患者対照研究で両者の強い関与が報告され、これは後に複数のコホート研究により確認された。この分野では Wynder、Doll、Dorn、Hammond 等々の研究が思い出される。ちなみに Wynder や Doll は今なお研究活動を続けており、その長年月の活動には感心させられる。

がん疫学の初期の研究では、何といっても喫煙と肺がんに関するものが多かった。日本では平山先生の大規模なコホート研究が1960年代にスタートしたし、がん登録も宮城県をはじめ、大阪府や各地で開始された。日本の特殊事情として、原爆被爆者と対照者についてのコホート研究も1950年に開始された。ヒトへの放射線障害の中で顕著なものは、白血病を始めとする発

がん作用であり、その意味で放射線影響研究所の仕事は、がんの疫学と密接な関係をもっている。

がんの原因は1/3は喫煙により、1/3は食生活によると推測されている。喫煙状態はアンケート調査でも簡単に把握できる。この事は、肺がんに対し喫煙（シガレット喫煙）が圧倒的な高リスク要因である事と相まって、多くの疫学的研究が両者の関係を明確に示すことができた。日本人男性の肺がんは、近いうちに胃がんを抜いてがん死亡のトップになる事は確実である。日本人男性の肺がんの2/3は喫煙由来と考えられ、がん対策の中でも喫煙対策は非常に重要である。

がんの1/3は食生活に起因すると推定されているが、両者の関係の解明は容易ではない。食生活は複雑であり、正確な把握は容易ではなく、同一地域の人々は類似の食生活を持ち、低い相対危険と相まってその解明が遅れてきた。しかしがん疫学の将来を考える場合、がんと食生活は非常に重要な研究分野であろう。これに関連し、micro-nutrients による介入研究結果が出始めたことは注目し値する。Blot らの世界で初めての介入研究結果が、JNCI の9月号に掲載された。この10月に世界栄養学会がオーストラリアのアデレイド

で行われ、私は Prevention of Cancer by Nutritional Means というシンポジウムを司会したが、インドの micro-nutrients 投与による口腔内前がん性病変の予防効果は、目を見張らせるものがあった（未出版）。

がんの疫学的研究の将来を考える時、学際的なアプローチが是非必要と思われる。疫学者がバイオ統計学、生化学、ウイルス学、分子生命科学、病理学、行動科学、その他の学問分野の人々と共に研究を進めて行く必要がある。またヒト集団を対象とする故に、研究者の枠を越えて行政サイドとの協力も重要であろう。研究対象も etiology にとどまらず、スクリーニング、デシジョン・メイキング、QOL、他広い範囲が対象となろう。前述の介入研究も実行には非常な困難性があるが、我が国でも実施を考えなければならない。

メカニズムを重視するドイツ医学の流れをくむ我が国では、とかく疫学的アプローチは軽視されてきた。がん疫学でも、喫煙対策の重要性が理解されたのは欧米諸国に較べ随分遅れたように思われる。しかし疫学研究結果はヒトの健康に直接結びつく重要なものであり、がんの疫学的研究も、その意味で前途は非常に明るいものと考えられる。

第4回日本疫学会総会の御案内

学会長 久道 茂
(東北大学医学部公衆衛生学教授)

今度仙台市で第4回日本疫学会総会の開催を会長としてお世話させていただくことになりました。日本疫学会は各分野の疫学研究者、臨床家、公衆衛生活動従事者が一堂に会して情報交換を行うことを目的として発足した比較的新しい学会ですが、総会開催のお世話役を担当したこれまでの会長の方々は、専門領域の特徴を生かした学術主

題をかがけて、様々な工夫をこらした運営をされてきました。第1回は循環器病の小町先生、第2回はがんの廣畑先生、第3回は難病、疾病登録の柳川先生という具合です。第4回の私は、臨床疫学という立場からということになっております。したがって、この学会に疫学会会員だけでなく、臨床の先生方にもできるだけ多く参加していた

だき、できればもっと多くの臨床の先生方に、本学会に入会してもらおうとのねらいもあるわけです。臨床研究の場で、疫学的手法が広く駆使され、それがごくあたりまえのことになれば、日本の疫学研究は飛躍的に発展するにちがいないと信じるからです。

シンポジウムには、「臨床・疫学からみた癌の自然史」をとりあげることに

しました。また、特別講演として米国の Kaiser Permanente の Director である Dr. G. D. Friedman を招聘し国際的な視野から検診の評価について、木村修一東北大学名誉教授には日本人の食生活と食文化について、さらに、教育講演として斎藤寛長崎大学衛生学教授から環境保健と疫学についての講演をお願いしております。会長講演として私が、がん対策と費用便益分析についてお話をさせていただく予定です。

一般演題は、口演とポスターセッションによる形式で発表されます。

さらに、今回は、新しい企画として総会終了の翌日（1月28日（金））に第1回 JEA 疫学セミナー「臨床疫学」を

開催いたします。なお、主なるプログラムは下記の通りです。

会員の皆様、また、会員でない方も多数のご参加をお待ちしております。

第1回

JEA 疫学セミナー

主題：「臨床疫学」

1月28日（金） 1994年

9：00 開会

10：00 「診断について」 検査の精度、ROC 分析

11：00 「リスクの考え方」 疫学研究のデザイン

13：00 「治療と予後」 治療効果判定、QOL

14：00 「臨床疫学の応用」 (1) 肺がん検診と臨床疫学

(2) 循環器疾患の臨床疫学

16：00 閉会

場 所

長陵会館記念ホール

〒980 仙台市青葉区広瀬町3-34 電話 022-227-2721

プログラム

1月25日（火）1994年

18：00 理事会

1月26日（水）1994年

9：45 開会

11：30 評議員会

13：30 特別講演 I

“Evaluation of Screening Tests : Principles and the Kaiser Permanente Experience”

Gary D. Friedman Director, Division of Research, Kaiser Permanente Medical Care Program, USA

14：30 会長講演

「がん対策と費用便益分析」

東北大学医学部公衆衛生学教授 久道 茂

17：00 教育講演

「環境保健と疫学—カドミウム汚染地域における20年間の追跡」

長崎大学衛生学教授 斎藤 寛

18：30 懇親会

1月27日（木）1994年

9：00 シンポジウム

「臨床・疫学からみた癌の自然史」

座長 矢嶋 聡 (東北大・産婦人科・教授)

大島 明 (大阪がん予防検診センター・部長)

11：30 総会

13：30 特別講演 II

「日本人の食文化と食生活—食文化形成についての栄養学的考察」

昭和女子大学大学院教授 (東北大学名誉教授) 木村 修一

17：30 閉会

理事会会場 —— 長陵会館記念ホール 〒980 仙台市青葉区広瀬町3-34 電話 022-227-2721

総会会場 —— 仙台市民会館 〒980 仙台市青葉区桜ヶ岡公園4-1 電話 022-262-4721

懇親会 —— 勝山館 〒980 仙台市青葉区上杉二丁目1-50 電話 022-213-9188

1992—1994年任期 第3回日本疫学会理事会議事要旨

日 時 1993年1月20日（水）18：00～20：40

場 所 栃木県総合文化センター

出席者 廣畑富雄、青山英康、飯田 稔、稲葉 裕、上田一雄、大島 明、大野良之、大原啓志、
嶋本 喬、曾田研二、田中平三、富永祐民、能勢隆之(監事)、久道 茂、饗輪眞澄、
三宅浩次、柳川 洋、渡辺 昌

委任状提出者

池田正之、大橋靖雄、佐々木隆一郎(監事)、吉村健清

協議事項

1. 前回理事会議事要旨を一部修正の上、承認した。
2. 1992年度事業報告
 - 1) 第2回日本疫学会総会
会長：廣畑富雄(九州大学医学部)
開催日：1992年1月30日(木)、31日(金)
場所：福岡リーセントホテル(福岡市)
 - 2) Journal of Epidemiology の刊行
Vol.2, No.1 (6月)：原著9編、Letters to the Editor 1編、JEA News
Vol.2, No.2 (12月)：原著6編、英文諸規則集、JEA News (1993年2月配布予定)
Supplement (11月)：Selected Papers of the IEA Regional Scientific Meeting in Asia-Pacific Region, Nagoya, May 9-11, 1991(佐々木隆一郎、青木國雄編)
 - 3) ニュース・レターの刊行
No.1 (12月)
3. 1993年度事業計画
 - 1) 第3回日本疫学会総会
会長：柳川 洋(自治医科大学)
開催日：1993年1月21日(木)、22日(金)
場所：栃木県総合文化センター(宇都宮市)
 - 2) Journal of Epidemiology の刊行
Vol.3, No.1 (6月)、Vol.3, No.2 (12月)

- 3) ニュース・レターの刊行
No.1 (6月)、No.2 (12月)
- 4) 国際交流委員会活動
国外で開催される疫学教育セミナー卒業研修会等に関する情報を会員に提供するシステムを構築し、運営する。
- 5) 第1回 JEA セミナー
オーガナイザー：久道 茂(東北大学医学部、第4回日本疫学会会長)
期日：1994年1月28日(金)
場所：東北大学医学部同窓会館
内容：臨床疫学に関するもの
- 6) Journal of Epidemiology 投稿勸奨活動(前回承認済)
 - ① Am J Epidemiology, Int J Epidemiology に広告を掲載し、諸外国、特にアジア・太平洋地域からの投稿を勸奨する。
 - ② IEA 総会(シドニー、オーストラリア)にて、投稿勸奨の展示ブースを設け、Journal of Epidemiology の最新号を配布する。
- 7) 諸規則集を350部増刷する。(前回承認済)
4. 1992年度決算報告(資料配布)
5. 1993年度予算案(資料配布)
6. 役員人事
 - 1) 第5回日本疫学会会長
飯田 稔(大阪府立成人病センター)
 - 2) 評議員の推薦(資料配布)
日山與彦(大阪府立成人病センター・調査課長)
正木基文(昭和大学医学部衛生学・講師)

報告事項

1. 庶務報告
1992年12月31日現在会員数
名譽会員 27名、評議員198名、普通会員483名、賛助会員2件
2. Journal of Epidemiology 編集委員会
1992年12月31日現在の投稿状況…
査読中論文 1編
3. ニュース・レター
Journal of Epidemiology への投稿勸奨についての記事を掲載する。
4. 国際交流委員会
国外で開催される疫学教育セミナー、卒業研修会等に関する情報をフロッピー・ディスクにinputした。この有効利用を検討中である。

その他

1. 本学会が発行、印刷するもの、すなわち Journal of Epidemiology の Supplement、総会講演集、ニュース・レター、理事会・評議員会・総会の議事録要旨、議事次第、資料等、全てのもを A4版に統一する。
2. "疾病予防啓蒙のための10か条"についての資料が3人の理事から理事長へ送付された。
3. 本疫学会の活性化をはかるために、各ブロックに支部会の設立を検討してはどうかとの意見が出された。

第4回日本疫学会理事会
開催予定日

日時 1993年6月5日(土)
午後1時
場所 東京

1992—1994年任期 第4回日本疫学会理事会議事要旨

日時 1993年6月5日(土) 13:00~16:50

場所 国立健康・栄養研究所第三共用会議室

出席者 廣畑富雄、飯田 稔、稲葉 裕、大島 明、佐々木隆一郎(監事)、嶋本 喬、田中平三、富永祐民、能勢隆之(監事)、久道 茂、柳川 洋、渡辺 昌

委任状提出者

青山英康、池田正之、上田一雄、大野良之、大橋靖雄、大原啓志、曾田研二、饗輪眞澄、三宅浩次、吉村健清

協議事項

1. 前回理事会議事要旨を原案通り承認した。
2. 1993年総会・評議員会議事要旨を原案通り承認した。
3. 理事会、総会・評議員会議事要旨を全文、ニュース・レターで公表する。

ただし、通常号に入れるか、別号にするかは、ニュース・レター編集委員会に一任する。

4. 国際交流委員会作成の「疫学卒業教育コース案内」は著作権の問題点が解決後に、20万円の補正予算で発刊する。配布方法（配布先、価格等）は、国際交流委員会に一任する。
5. 日本医学会への加入に向けて努力する。1994年日本医学会評議員会への申請資格、手続き等について、事務局が資料・情報収集を行う。

6. 日本疫学会奨励賞検討委員会を設置し、次の理事に委員を委嘱する。

富永祐民（委員長）、柳川 洋、嶋本 喬

7. 富永祐民の日本疫学会奨励賞検討委員会就任に伴い、同氏の名誉会員の推薦担当を解き、その後任として飯田 稔に委嘱する。

8. 評議員の推薦

大前和幸（慶応義塾大学医学部衛生学公衆衛生学・助教授）

金森雅夫（東邦大学医学部衛生学・助教授）

坂田潤美（自治医科大学公衆衛生学・講師）

中村好一（自治医科大学公衆衛生学・講師）

三野善央（岡山大学医学部衛生学・助教授）

9. 学会、セミナー等の後援

- 1) International Workshop on

Clinical Epidemiology Training in Diabetes Mellitus

10. 事務局電話番号、FAX 番号変更連絡費（印刷費18,540円、郵送費31,816円、計50,356円）を承認した。

11. Journal of Epidemiology への投稿増加をはかるために、全評議員に個人宛の投稿奨励通知を送付する。

Journal of Epidemiology が、Index Medicus, Med-Line 等に引用されるように努める。編集委員会は、このことに関する情報を収集する。

報告事項

1. 第4会日本疫学会学術総会

久道 茂会長より、日程、場所、内容等について、別紙の通り報告があった。

2. 第1回 JEA 疫学セミナー「臨床疫学」久道 茂オーガナイザーより、その概要が別紙の通り示されたが、内容等の詳細は、現在検討中であるとの報告があった。

3. 編集委員会
 - 1) Vol.3, No.1は、原著7編等からなり、初回校正中である。
 - 2) 現在、査読6編、著者修正3編である。

- 3) American Journal of Epidemiology と International J. of Epidemiology における Journal of Epidemiology の投稿奨励 PR は、無料掲載されることになった。その代償として、両誌の PR を Journal of Epidemiology に無料掲載することとなった。

- 4) 第13回国際疫学会の展示場に Journal of Epidemiology の投稿奨励ブースが無料で設置されることになった。このための予算は、無料配布用 Journal of

Epidemiology の増刷にまわすこととする。

- 5) 非会員外国人が投稿する場合、会員の recommendation letter を必要としないことにした。

- 6) 比較的若い会員を“編集協力者”に指名し、査読のみならず、積極的に投稿してもらうことにする。

その他

1. 会員が第13回国際疫学会（オーストラリア・シドニー、1993年9月26日～29日）に多数参加することを期待する。青木國雄名誉会員が理事長および次期会長に、また、他の会員が理事に指名されることを積極的に支援する。

2. 各理事が会務の所掌分担に努めることとする。

3. 柳川 洋理事より、本学会が後援することになっている、日英共催による「疫学・公衆衛生コース」の概要について、別紙の通り説明があった。

4. 飯田 稔次期会長より、第5回日本疫学会学術総会の準備状況についての説明があった。

5. 久道 茂理事より、日本医学会特別シンポジウム「医と法」(仙台、1994年8月28、29日)への参加要請があった。

6. 久道 茂理事より、日本医学会医学賞への応募要請があった。

第5回日本疫学会理事会
開催予定日

日 時 1993年10月20日(水)

または 21日(木)

場 所 北九州市

● 第10回国際エイズ会議／国際STD会議のご案内 ●

会 期：平成6年(1994年)8月7日(日)～12日(金)の6日間

会 場：パシフィコ横浜（横浜国際平和会議場）

テ ー マ：地球規模でエイズに挑む — 未来のために力をあわせて —

演題締切：平成6年2月末日必着

問い合わせ・第2次アナウンスメントの請求先

：事務局 〒150東京都渋谷区神山町5-3 並木ビル 4階コングレ内

TEL 03-3466-5812 FAX 03-3466-5929